
Treat or not …

ゆきな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T r e a t o r n o t :

【Nコード】

N 0 9 4 5 Y

【作者名】

ゆきな

【あらすじ】

薄桜鬼SSL・斎土

10月31日、薄桜学園ではハロウィンを祝う仮装イベントが行われることになった。斎藤は風紀委員の仕事を優先して校内の身回りを開始し、そこで何やら企み顔のミイラ男に出会う。。。

※「片恋」「罨にご用心」「秘密の恋の続け方」から続くお話ですが、単独でも問題はないと思います。

（「ノベリスト」様でも公開しております。）

10月31日18時。

すっかり暗くなった薄桜学園の校庭に、ぽつりとオレンジ色の明かりが灯った。それは徐々に数を増やし、周囲を淡く照らす幻想的な空間を作り出していく。

灯りの正体は大小様々なカボチャのランタン。その全てが手作り、と言えば聞こえは良いが、美術の授業の一環として作成されたものだ。成績に影響すると言われていたこともあって、皆一様に工夫を凝らした力作が揃っている。奇怪な顔を作った王道作品がほとんどだが、中には目を瞪るほどの精巧さでカボチャに囚んだ話のワンシーンを描いたものまであって、見る者の目を飽きさせない。

それらの間を一人の魔女が歩いていた。黒い膝丈ワンピースにシヨートケープを羽織り、大きな帽子で顔を隠している。胸の前で箒を抱えて内部で炎を揺らめかせるカボチャを覗き込み、隣に移ってまたその明かりを見つめ、今度は反対側へと足を向けてと、まるで踊るように縫っていく。

ふいに、魔女の足が止まった。声をかけられたのか、きよろきよろと周囲を見回してぺこりと頭を下げる様は愛らしく、帽子に隠れてその表情は伺えないが、きつとはにかんだように笑っているのだろう。魔女を取り巻くモンスターたちはそう夢想してヤニ下がった。そして、一定の距離を保ったまま、魔女のあとをつける。それは各々が趣向を凝らした仮装などよりよっぽど奇怪な様相だ。

豪放磊落、快闊天空を地で行く近藤校長の鶴の一声で、今日この日にハロウィンパーティーが開催されると決まったのが一ヶ月前のこと。仮装は自由、飲食物は各自常識の範囲内で持ち込み可、ただし節度を持って楽しむべし、と、かなりの部分を生徒の自主性に任

せたこのイベント。ランタンの間を歩く魔女とモンスターの姿は、今回の企画を象徴するものといえた。

一人の魔女に翻弄される数多のモンスターの集団を屋上から見下ろして、斎藤は自分と同じく制服姿のままの後輩に声をかけた。

「仮装イベントともなれば男共は皆揃って雪村を付け狙う、か。南雲の読みは正しかったようだな。」

「すみません。ご迷惑をおかけします。」

そういつて下げられた頭を見つめ、斎藤は頬を緩めた。短髪のウィッグが気になるのか、頭頂部を押さえた格好で向けられた視線を捉え、小さく笑う。

「南雲なら“当然だ”と胸を張る。見破られたくなければもっと堂々としている。」

「は、はい！」

ぐっと胸をそらし、南雲薫に変装した雪村千鶴はまた校庭を見下ろした。かわいらしい魔女姿でモンスターを翻弄する兄、薫を見つめて頬を緩める。

「でもよかった。薫も楽しんでいるみたいですね。」

（そう見えるのか？）

思わず口について出そうになる言葉を飲みこみ、斎藤は千鶴に気

付かれないようにそつと息を吐いた。

魔女を千鶴だと思い込んでいる哀れなモンスター達はともかく、最愛の妹にまでそう思われては、暴走しそうな怒りを抑え込みながら少女らしく振舞おうとしている彼が救われない。だが、彼が兄として守ろうとしているのが彼女のこういった純真すぎる点でもあることを察している身としては、それを告げることも憚られる。

斎藤は無表情の下でいくつもの自問自答を繰り返した末、その話には触れずに話題を変えた。

「元々の顔形や背格好が似ているとはいえ、歩き方や態度でそれと知られることもある。風紀委員に自ら近寄る者は多くないだろうが、極力南雲らしく見えるよう心掛けてくれ。」

「はい、頑張ります。」

どう鼻肩目に見ても雪村千鶴にしか見えない『南雲薫』は、複雑そうな表情を見せる斎藤に力強く頷き、にこりと笑った。

（……事が露見するのも時間の問題だな。）

南雲であれば絶対見せるはずのない満面の笑顔に苦笑を返し、斎藤は校舎へ続く扉へと足を向けた。肩越しに振り返り、視線で扉を示す。

「そろそろ行くぞ。俺から離れずについて来い。」

「はい、わかり………わかった。」

少しだけ低い声で言いなおし、千鶴は斎藤を追って駆け出した。

その足元は若干内股気味になっていたのだが、それを指摘する者はもういなかった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「あれ、一君？」

耳慣れた声に振り返ると、猫のように目を細めたミイラ男が小さく首を傾げている。その声と仕種から相手を持定すると、斎藤は軽く後ろを振り返った。小さく頷く千鶴を確認してから、ゆっくりと男の元へ向かう。

「総司、お前も仮装していたのか。」

「そりゃあね、折角近藤さんが考えてくれたイベントなんだから、楽しまなくちゃ勿体ないじゃない。」

こくりと頷く仕種は普段よりも彼を幼く見せる。だがその瞳は何かを企んでいる時の生き生きとした光を放っていて、斎藤はすうっと目を細めた。

「……何を考えている？」

「あははは、そんなの決まってるでしょ。……Trick or Treat！」

お決まりの台詞と共にずっと差し出された左手を見つめ、斎藤はため息をついた。その手には構わず、じっと沖田の目を覗き込む。

「俺は風紀委員としての役目を果たすためにここにいる。そういうことはイベント参加者に言え。」

「そう言うと思ったよ。だから、はい。」

そう言って押し付けられたのは彼が右手に持っていた大きな紙袋。反射的に受け取ってしまったそれと沖田の顔を見比べて、斎藤は首を傾げる。

「何だこれは。」

「着替え。」

「一体誰の――」

「総司！来た来た来た来た――っ！！！」

再び尋ねようとした斎藤を遮って、賑やかな声が駆け込んでくる。キラキラと目を輝かせ、全力疾走直後らしく頬を上気させてはいるが心なし青ざめた印象の子犬男ならぬ狼男に、斎藤は眉を寄せた。

「平助、廊下は走るな。」

「悪い一君、今それどころじゃないんだよ！総司、早く逃げないとマジ殺される！！もう怒り方ハンパねえしっ！！！！」

「あっはははは、僕はちょっと見てみたいんだけどな。」

「馬鹿言うなって！俺はまだ死にたくねえからなっ！」

「はいはい。じゃあ一君に千鶴ちゃん、またね。」

「じゃあな！……って、千鶴？千鶴がどこにいたんだよ？」

彼等らしい一言を残して賑やかな二人が遠ざかっていく。それを半ば呆然と見送った後、斎藤は押しつけられた紙袋を開いた。学生の制服とは異なる黒い服に見覚えがあるような気もするが、それよりも“来た”と言っていた藤堂の言葉のほうが気になる。

斎藤は紙袋を小脇に抱えると、くるりと振り向いて千鶴を見やった。

「あの2人に服を取り上げられた者がまもなく現れるだろう。離れて待っているか？」

「いえ、ここにいます。平助君には気付かれてなかったみたいだから、少しは誤魔化せると思います。」

「……そうか。」

平助だから気付かなかったのだろう、とはさすがに言えず、斎藤は小さく頷いた。それと同時に、遠くからどよめきのような感嘆の声が聞こえてきた。それは一種異様な興奮と緊張を孕んでいて、周囲にいた者たちの視線が廊下の奥へと向けられる。

斎藤もそれに倣って、大きなため息と共に振り返り。

そして硬直した。

「斎藤っ！！！！」

耳に馴染んだ声が自分の名を呼ぶ。それでも斎藤は動けない。

廊下の向こうから走ってくるのは古典担当教師、土方。

白皙の美貌を修羅の形相に歪め、髪を振り乱したその姿に普段の冷静さは見られない。只事ではないことはその顔を見れば明白だったが、何よりその服装が斎藤から全ての思考能力を奪い去っていた。

薄紫の着物に黒い帯を締めた和装。それらがよく映える紅潮した頬と引き結ばれた唇。それだけならば、まだ“よく似合っている”と褒めればいい。たとえそれが、女物だとしても、である。

問題は彼の出で立ちである。腕まくりした袖、膝上までたくしあげた裾。余計な肉のついていない二の腕と露わになった両脚は、足袋の白さも相まって眩しいほどの艶めかしさだ。乱れた和装との相乗効果は計り知れない。

何事かと廊下に現れた者は土方の様相に、ある者は頬を染め、ある者は青ざめ、そしてある者は絶句した。

斎藤も例に漏れず、返事をすることもできないまま向かってくる男を凝視し続け、廊下の中央で立ち尽くした。

「ちようどいいところに！」

「っ！！」

ダン、と足を踏み鳴らして急停止した和装美人は、壮絶なまでの色気を滲ませた顔に青筋を浮かべ斎藤を睨みつけた。

「総司と平助はどっちに言った！」

「……………を……………」

ふるりと斎藤の肩が震える。それに気付いた雪村が怯えたように土方と斎藤を見比べているが、彼女を氣遣うことができるほど冷静な者はいない。

「おい聞いてんのか！総司と平助はどこに行っただって訊いてんだよ！」

「……………にを……………て……………」

それもそのはず。この場にいるのは、激高した土方と彼の姿に惹きつけられた哀れな犠牲者、何が起きたのかと取り巻く野次馬。

そして、我を忘れ、周囲の目など一切視界に入らなくなっていた斎藤だけだったのだから。

「さっさと吐け！隠し立てするとお前でも容赦——」

「何をやっているんだあんたはっ！！！！！」

窓ガラスを震わす斎藤の怒声が、学校中に響き渡る。

それを耳にして、藤堂は眼を丸くして足を止めて振り返り、沖田は二重に仕掛けた悪戯の成功を悟って破顔した。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「近藤さんがな……」

「……………」

「近藤さんが、これを着ろって言っていたって総司と平助が持ってきたんだ……」

「……………」

「一応断ったんだが、イベントは全員参加だって言われて……だが着替え終わった頃に近藤さんが来て、騙されたことがわかって……」

「……………」

「俺の服は総司が持って行っちゃったから、あいつらとつかまえてねえと着替えもできねえと思ったら、もう他に方法がなくてだな……」

「……………」

「おい、斎藤……聞いてるか？」

「……聞いています。」

土方の背後にまわり、固く締められた帯に苦戦しながら斎藤が答える。

国語科資料室の一角、普段は教材をしまう倉庫として使用している部屋で土方の着替えを手伝っているのだが、着物など普段触れる

機会のない斎藤にとってそれは未知の領域だ。どのように結ばれているのかよくわからないまま黙々と手を動かす斎藤に、土方はまるで言い訳するかのようこの状況に陥った経緯を話して聞かせる。

「……今日、総司か平助に菓子を強請られませんでしたか。」

緩んだ隙間から帯枕を抜き、帯を緩めていく。そうしながら問いかけると、目の前で土方の髪が揺れた。小さく首を傾げ、ああ、と声を上げる。

「そういや、朝一番にのど飴持っていないかって総司が来たな。持ってねえって言ったらそのまま帰って行ったが……」

「やはり。」

「なんだ？ お前何か知ってるのか。」

「Trick or Treat. ……これもきつと、お菓子をくれなかったことに対する総司なりの悪戯なのでしょう。」

その言葉に土方の動きが止まる。その間に一気に帯を緩め、足元へそれを落とした。次いで前へと回り、伊達締め、腰紐と解いていくと、上品な薄紫の着物の下から光沢のある長襦袢が現れた。その眩しさに、斎藤の手が、視線が、止まる。

「あ、あとは自分で出来る。お前は雪村の所に戻ってやれ。」

斎藤の視線に気付いたのか、土方は慌てたようにそう告げるとくると背を向けた。急変した態度に、斎藤はチリリと胸を焦がす熱を感じて眉を寄せた。

「Trick or Treat.」

気付けば、斎藤はこの日あちこちで叫ばれている言葉を向けていた。無意識のうちに伸ばした手は襦袢の上を滑り、前へと回される。ぐっと抱き寄せると土方の身体が僅かに強ばるのがわかった。

「さい、とう……?」

困惑と、微かな怯えを含んだ声が斎藤の鼓膜を震わせる。それは甘く誘うようでありながら斎藤の全てを許容するものではない。それが一層、斎藤の胸を締め付ける。

“生徒には手を出さない”という彼自身の言葉の通り、土方はいっただって教師としての仮面を外そうとはしなかった。沖田や藤堂の言葉にいちいち腹を立て、怒鳴り、そして笑う。そんな当たり前の表情さえなかなか見せてはくれない。斎藤の前では、彼はことさらに教師であろうとし続ける。それは今のよう二人きりの時にも崩れない。

いや、二人きりの時にこそ、崩れないのだ。

「Trick or Treat. ……いや、Treat or not か。」

「な、何言……っ、……」

拘束から逃れようと身を振る動きを利用して身体を反転させると、そのまま唇を塞ぐ。ひくりと震える身体を抱きしめ、大きく見開かれた瞳を覗き込んだ。

「饗応があろうとなかろうと、ですよ。英語は苦手ですか？」

「そういう意味じゃっ……や、……うん……」

今度はいきなり深く口付け、奥へと逃げる舌を捕らえて弄る。手探りで襦袢の紐を解くと、緩く開いた胸元へと手を滑り込ませた。

「っさいと……待っ……ふ……」

「土方さん。」

「っ?!」

わざと変えた呼称に土方が息を飲む。そこに映る自分の緊張した顔を見つめ、斎藤は目を伏せた。

「今日はハロウィンですから。今だけは、あんたは教師ではなく、俺も生徒ではない。それでは駄目ですか。」

「それ……は……」

「俺達はこことは違う場所、違う時代に生まれた。教師と生徒という関係は、今だけの仮の姿。だから――」

耳朶に囁き、口付ける。形をなぞるように舌を這わせ、甘く噛んで。あえかな吐息を零す背を宥めるように撫で、再びそこに吹き込む。

それは、一夜限りの魔法の言葉。

「だから土方さん。……Trick or Treat.」

「っだから、俺は何も持ってねえって……」

「いや？俺にとって、あんた以上のもてなしなどない。」

その言葉に、土方の目が見開かれた。ぽかんと斎藤を見返し、やがて小さく吹き出すとくすくす笑いながらこつんと額を斎藤に寄せる。

「馬鹿野郎。T r i c k も T r e a t も同じなら、結局やることは変わんねえじゃねえか。」

呆れたように呟く声からは、緊張も気負いも、拒絶も感じられない。身体からもすんと力が抜けて、ただ穏やかに笑うだけの土方に斎藤も自然と浮かんだ笑みで答える。

「本当にそう思いますか？」

ゆるりと腰に触れ、小さく跳ねた身体を抱きしめた。強ばりが解けた土方の身体は斎藤に沿うように腕の中に収まり、ゆっくりとその体重を預けてくる。それを受け止め、長襦袢を払い落として肌襦袢を開き、現れた白い肌を撫でてからそつと唇を寄せた。

「意識が変われば感じ方も変わるもの。」

「っ……」

囁く吐息に土方が息を飲み、両手が斎藤の肩にかかる。縋るように掴むその指はそのままに、斎藤は首筋から鎖骨の上へと唇を滑らせた。強く吸って痕を残し、顔を上げる。土方の顔に欲の色が滲ん

でいることを見て取って、斎藤はふわりとその顔に笑みを浮かべた。そんな斎藤と目があった土方の頬に朱が上る。

誘われるように濡れた唇に自身のそれを近づけた時、控えめなノックの音が倉庫内に響いた。

「土方先生、斎藤さん。」

扉の向こうから聞こえてきた千鶴の声に、はっと息を飲んだ土方の顔が教師のそれに戻る。一瞬前まで浮かんでいた情欲の色が消え去ったことを知って、斎藤は諦めたように息を吐き、彼女に声をかけた。

「どうした。」

「あ、えっと……」

「千鶴を引き取りに来たんだが……まだかかりそうか？」

逡巡するように途切れた少女の声を、艶やかな男の声が引き継いだ。その声の主を悟って、斎藤は土方を放して立ち上がった。床に置いたままの紙袋を拾い上げ、土方へと手渡す。

「……いえ、今解けました。もう大丈夫です。」

扉の向こうに声を投げかけ、未だ座り込んだままの土方のそばに膝をついた。視線を泳がせ、目を合わせようとしない男の耳朶に唇を寄せ、低く囁く。

「原田先生がいる間に服を着てください。でないと……」

意味深に言葉を切り、先ほど付けたばかりの痕に指を這わせる。
そのまま胸元へと指を滑らせると、土方の背がひくりと震えた。何かを言いかけて開いた唇が、結局何も紡げずに閉じられたのを見て、斎藤は今度こそ土方と己の欲に背を向け、雪村と彼女を迎えに来た原田の元へと足を向けた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「それで原田先生。雪村を引き取りに来た、とは？」

「校庭をうろついてた魔女が千鶴じゃねえってバレたらしい。パニック状態の男共に見つかる前に、職員室に隔離したほうがいい思ってた。」

「なるほど。」

もっともな理由に斎藤は頷き、ふとその顔に苦笑を浮かべた。堪えきれずに手を出そうとした愚か者がいたのか、南雲の堪忍袋の緒が切れたのかはわからないが、おそらく今頃、校庭は阿鼻叫喚の地獄絵図の様相を呈しているのだろう。

それは同時に「本物の雪村千鶴はどこにいる」という流れになるだろうし、そうなれば制服姿の南雲薫が怪しく見えるのは当然のこと。今はもう風紀委員の名も抑止力にはなり得ない。

となれば、一緒にいるところを見られている斎藤は雪村とは別の場所で陽動にでる方がいいだろう。だが、南雲に雪村の保護を任されている身としては独断で彼女から離れるわけにもいかない。

しばらく考え込んだ後、斎藤は顔を上げて雪村に向き直った。

「雪村、お前はどうしたい？」

「え……？」

「俺は南雲からあんたの保護を任されている。だがこうなってしまうのは俺の側にいることが最善とは思えん。ならば、このままここに身を隠すか、移動の危険は伴うが原田先生の言うとおり職員室へ移るかのー」

「ここに残るのはお勧めしねえな。」

かたりと音を立てて扉が開き、奥から土方が姿を現した。手櫛で髪を直しながら歩み寄ると、原田の前で足を止めた。

「総司のせいでとんだバカ騒ぎを演じちまったからな。そろそろ斎藤と一緒にここに向かった“南雲”が雪村だったと気付くヤツも出てくるはずだ。それなら場所を変えとくべきだろう。職員室なら少しは菓子も置いてあったはずだし、ハロウインを口実にしたバカ共ならそれで黙らせることができるだろう。」

「だな。」

したり顔で頷く原田を一瞥し、土方はぺしりとその頭をはたいた。

「つーか原田。てめえ今日は珍しく飴なんか持ってると思ったら、この騒ぎ見越してやがったな？」

憎々しげに吐き出す土方を見上げて肩をすくめると、原田はニヤリと笑って立ち上がった。

「近藤さんも言ってたろ？ 飲食物は各自常識の範囲内で持ち込み可、つてな。つまりはそういうことだ。」

ぽんぽんと肩を叩いて笑う原田を睨み、やがて土方は大きくため息をついた。

「近藤さんはそんなつもりで……まあいい。そんなじゃ原田、雪村は任せた。斎藤は見回りついでに南雲を探して、このことを伝えてやれ。」

「わかりました。」

「おう。行くぞ、千鶴。」

「あ、はい。土方先生、斎藤さん、本当にありがとうございました。」

まあいい、と言いながらまだどこか不満そうな表情で土方がそれぞれに指示を出す。それに二人が応え、雪村がそれに続いた。

「そうだ斎藤、ちょっと待て。」

原田と雪村が連れ立って部屋を出るのに続いて退室すると、閉めたばかりの扉から声がかかった。何事かと振り返ると、目の前でそれが内側から開かれる。

「忘れモンだ。」

その言葉と共に、ばさりと視界が黒で塗りつぶされた。頭からすっぽりと大きな布に覆われた斎藤の目の前に、ずいと土方が顔を近

づける。思わず後退りそうになる身体が、逆に前へと引き寄せられ……唇が、重なった。

「っ?!」

「どうせてめえも菓子なんか持ってねえんだろ? だったら文句は言えねえよな。」

目の前数センチの位置で土方の目が細められる。哑然とする斎藤を見つめて土方はニヤリと口端を上げた。

「悪戯っつーのはこういうのを言うんだよ。わかったらさっさと南雲を捕まえてこい。ドラキュラ伯爵。」

斎藤の全身をすっぽりと黒いマントが覆う。それを素早く首元で止め、立て襟を直すと、そこにいるのは土方の言うとおり、ドラキュラに仮装したように見える斎藤の姿。満足そうにそれを見つめて頷くと、土方はくると背を向けた。

「俺はしばらくここにいるから。……それ、今日中に返しに来いよ。」

かろうじて聞こえる程度の囁きを残して国語科資料室に戻っている土方の耳が赤い。斎藤も自分の顔がそれ以上に赤く染まっているであろうことを思い、一人、マントで顔を覆うのだった。

(後書き)

十十十あとかき十十十

薄桜鬼SSLでハロウィンパーティー！……という名のこった煮。
昼間にTwitterで流した小話のほうかハロウィンっぽいかな、
とも思ったのですが、こちらはいろいろと140字の分割が無理そ
うなので。

ちょっと補足。

ドラキュラの衣装は、近藤さんが土方さんに用意したものです。彼
はそれを届けに来て、お綺麗な土方さんを褒めたわけですね。「俺
が用意した衣装より似合ってるな」と。

一方の沖田さん。彼は女装させた土方さんを斎藤さんに引き合わせ
たかったです。あんな格好で追いかけてくるとは思っていなか
った……はず。。。

それにしても、なぜにこんなに長くなるかな。

最後の土方さんのセリフを入れるタイミングが作れなかったのが一
番の原因なのはわかってはいるのですが、それにしても……

というか最近長くなる傾向が強いな……反省。

これでもかなり削ったんですけどね……猛省。

お読みいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0945y/>

Treat or not …

2011年10月31日19時32分発行